

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 9 日現在

機関番号：12613

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520616

研究課題名(和文)日本語母語話者と中国人日本語学習者の作文・独話・対話に見る接続詞使用の対照研究

研究課題名(英文)Comparative study of Japanese discourse markers Japanese native speakers and Chinese learners of Japanese use in monologue, dialogue and written text

研究代表者

石黒 圭 (ISHIGURO, Kei)

一橋大学・国際教育センター・教授

研究者番号：40313449

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円、(間接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：中国人日本語学習者は、読んだり書いたりするのに比べて、聞いたり話したりするのが苦手な傾向があり、とくに長く話すのが苦手なことが多い。そこで、独話における中国人日本語学習者の接続詞・感動詞の使用実態を、日本語母語話者と比較しながら調査した。

接続詞については、日本語のレベルが上がるにつれて、また留学経験によって、その使用数とそのバリエーションが増加する一方、感動詞については、日本語のレベルが上がるにつれて、また留学経験によって、その使用数が減少する傾向にあることが調査をつうじて明らかになった。なお、接続詞には母語の影響はあまり見られないが、感動詞には母語の強い影響が見られることもわかった。

研究成果の概要(英文)：Chinese learners of Japanese have more difficulty with oral communication than written communication. They are weak in producing long discourses orally. I compared the monologues of Chinese learners of Japanese with those of Japanese native speakers from the viewpoint of connective markers and fillers.

It was found that the frequency and variety of Chinese learners' connective markers tend to increase as their level of Japanese improves or they experience studying abroad, while the frequency of their fillers tends to decrease. It was shown that Chinese learners' native language has a weak influence on their use of connective markers and a strong influence on their use of fillers.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語教育

キーワード：接続詞 作文 独話 対話 談話 感動詞 指示詞

1. 研究開始当初の背景

日本語学習者は、一般に、理解よりも産出が苦手だが、中国語母語話者はとくにその傾向が強い。文章理解ならば、漢字を見ればだいたいの意味がわかるため、漢字に依存して理解を進めることが可能であるが、産出の場合はそれが難しいからである。

とくに、独話(モノローグ)は、作文にくらべ、中国人日本語学習者が苦手とするところである。表現者が一方的に産出するという点では同じであるが、独話の場合は、限られた時間のなかで、音に依存して、その場で話を紡いでいかなければならないからである。

その場で話を紡いでいくさいに役に立つのは、ディスコース形成に関わる表現である。とくに、ディスコースの展開を決める接続詞、ディスコースを形成する過程を実況する感動詞、ディスコースの話題の連続を担う指示詞の三つがうまく使えれば、独話を産出するさいの困難を相当程度軽減することが期待でき、中国人日本語学習者を対象とした日本語教育に資するのではないかと考えた。

2. 研究の目的

研究の目的は、中国人日本語学習者と日本語母語話者の独話における接続詞・感動詞・指示詞の使用状況を調査し、比較・分析し、中国人日本語学習者がどのようにこの3種の表現を使えば、効率よく独話を産出できるのかを検討することにある。

3. 研究の方法

中国人日本語学習者と日本語母語話者の独話における接続詞・感動詞・指示詞の使用状況の違いを明確にするために、四つの観点から比較ができるような調査設計を行った。

比較の第一の観点は、調査対象者である。中国人日本語学習者と日本語母語話者を対象とすることはもちろんであるが、中国人日本語学習者のディスコースは、日本語のレベルと来日経験の有無が大きな影響を与えると考えた。

そこで、中国人日本語学習者は、中国国内(北京)の日本語学科の大学学部3年生(日本留学経験なし)12名、同4年生(日本留学経験なし)12名、同4年生(日本留学経験あり)12名という三つのグループを設定した。ただし、中国国内の大学の中国人日本語学習者は女性が圧倒的に多いため、調査対象者は女性で統一した。一方、日本語母語話者は日本国内(東京)の大学学部生48名とし、人数が多いので男女は半々とした。

比較の第二の観点は、母語である。ディスコースに母語の転移がどの程度起きているか知りたかったため、中国国内(北京)の大学生12名(全員日本語を専攻していない学生)を対象に、中国語による調査もあわせて行った。

比較の第三の観点は、ディスコースの内容

である。ディスコースの内容によっても産出が影響を受けることを考え、視聴した内容をすぐに再生する「映画」、かなり以前の経験を思い出す「旅行」の二つに分け、調査対象者を半分に分けて調査した。脳内の記憶の浅いところにあるものと、深いところにあるものとは、接続詞・指示詞・感動詞の使用に違いが見られると考えたためである。

「映画」は、イギリスとオランダで製作されたマイケル・デュドク・ドゥ・ヴィット監督による8分の無声短編アニメーション映画『岸辺のふたり』(原題: Father and Daughter)を用いた。2001年米国・英国アカデミー賞短編アニメーション賞を受賞した作品である。1度では、ストーリーの理解が難しいため、調査対象者には2度見せている。一方、「旅行」は、自分自身が過去に経験した印象的な旅行について語ってもらうというものであった。

比較の第四の観点は、産出の方法である。今回の調査でとくに見たかったのは独話であるが、それと比較する意味で、対話と作文のデータも合わせて収集することにした。

対話は、同性の友人2名がペアになって行った。独話は、調査対象者と面識のない人物にたいして一方的に説明するという形式で行った。作文は、分量にとくに制限は加えずにパソコンによって入力してもらった。調査の順序は、独話 作文 対話である。対話・独話といった音声データは、すべて文字化を施した。

4. 研究成果

今回の調査の結果と分析について、独話におけるディスコース形成に関わる表現を中心に、接続詞・感動詞・指示詞に分けて紹介する。

(1) 接続詞について調査で明らかになったことは、以下の三点であった。

全体としては、日本語のレベルが上がるにつれて接続詞の使用数とそのバリエーションが増えている。

映画と旅行では傾向に違いがみられ、留学経験に関係がある。

母語による影響はあまり感じられない。

については、教科書に出てくる接続詞を中国人日本語学習者がきちんと習得していることがわかった。また、来日経験があると、接続詞の二重使用や教科書にあまり出てこない接続詞も、日本での生活のなかで徐々に使えるようになることも明らかになった。

については、出現頻度の高い接続詞「で」に着目した。接続詞「で」は、日本語母語話者の独話では「映画」「旅行」いずれにも多くみられたが、中国人日本語学習者の独話では、留学経験のない者はあまり使わず、留学経験のある者は「映画」でのみよく用いてい

た。ここから、「映画」のようなストーリー説明の「で」の習得は比較的容易であるが、「旅行」のようなストーリー説明の「で」の習得は相対的に困難であることがわかった。

については、中国人日本語学習者の母語である中国語で頻出する「然后」が「で」に転移するかどうかを調査したところ、転移することは考えにくいことがわかった。「で」も頻度は高いものの、「然后」の頻度に比べるとはるかに低く、また、両者の使用箇所はかならずしも対応していないことから、異なる役割を果たしていると考えられる。むしろ、英語母語話者に同様の調査をしたところ、英語の「and」がこの「然后」に近い機能を果たしていることがわかった。

接続詞の選択がうまくいくと、話し手は後続文脈の展開を絞ることができ、思考の流れを整理しやすくなるし、聞き手も話し手の思考の流れを追いやすくなる。これまで接続詞教育は、論理関係を表示する書くための教育が中心であったが、今後は、今回のような調査を下敷きにしながら、オンラインで話が続けられる話すための教育方法を確立する必要があると考えられる。

(2) 感動詞について調査で明らかになったことは、以下の三点であった。なお、感動詞の大半はフィラーが占めている。

感動詞全体の使用数は、レベルが上がると、がくんと少なくなる段階がある。映画と旅行ではその段階が異なり、映画では日本語母語話者のみが少なく、母語話者かどうかは分かれ目となっているのたいし、旅行では日本語母語話者に比べて留学経験のある学習者も少なく、留学経験の有無が分かれ目となっている。日本語のレベルの低い学習者の使う感動詞は、日本語にないものの頻度が高い。

について、感動詞の使用数が、日本語のレベルが上がるとがくんと下がるのは、感動詞を使わなくても必要な内容や語形にアクセスできるようになるからであろう。

について、映画のほうが、使用数の減少する段階が遅く訪れるのは、旅行のような個人的な経験を語るほうが、映画のような視聴経験を語るよりも自分の言葉で語れ、楽だからであろう。

について、日本語にないものの頻度が高いのは、話すときに中国語で考えた内容を日本語に訳すことが多く、産出の思考回路を母語のもの依存しているからであろう。

話のプランをオンラインで考えるとき、つまり、話を次にどう続けていこうかその場で考えるとき、思考過程の段階に合った感動詞をうまく選択できると、話し手が考えるのが楽になるし、聞き手も聞くのが楽になる。教室で教える方法も提案されるようになりつ

つあるが、その場合、どのような順序で導入すればよいか、今回の調査結果が参考になると考えられる。

(3) 指示詞については、対話・独話・作文それぞれの特徴を、日本語母語話者のデータを中心にまとめ、以下の四点が明らかになった。

対話における指示詞：眼前にいる聞き手とのインターアクションがあるため、聞き手を強く意識した指示詞使用に特徴がある。聞き手との知識の共有を確認し、共感を強めるために記憶指示のア系がよく用いられる。また、聞き手の発話を尊重するために、聞き手の発話を指す文脈指示のソ系がよく用いられる。

独話における指示詞：一方向的に長く話を続けるため、話の連続を表す指示詞使用に特徴がある。使い分けの分布は作文に近いが、冗長性が高く、文脈指示のソ系で状況や話題の連続を構成する。また、話が興に乗ると、対話の指示詞使用に近づく傾向が見られる。

作文における指示詞：読み手が眼前にいないため、談話としての自立性が高い指示詞使用に特徴がある。指示詞の使用は独話に近いが、指示詞よりも内包表示あるいは省略を優先する。また、談話構造を強く意識し、話の内部をソ系が、外部をコ系が表示する。

「映画」「旅行」の指示詞の相違：対話では「映画」のほうがア系の指示詞が多い。これは、話し手と聞き手の共通体験が話題であることが影響している。また、対話・独話といった話し言葉では「映画」のほうがコ系の指示詞が多い。これは、先ほど見たばかりの浅い記憶にある映像が、あたかも眼前にあるかのように語られるのと関連がある。

なお、終助詞についても日本語母語話者のデータをまとめ、独話における終助詞「ね」が、「映画」よりも「旅行」にはるかに多いことを明らかにした。

ただし、指示詞と終助詞については、中国人日本語学習者の分析がまだ十分ではなく、今後も引き続き分析を行っていきたいと考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計5件)

(1) 石黒圭「談話の『場』によるコ系・ソ系・ア系の指示詞の使い分け」『表現研究』96、pp.3-12、表現学会、2012.10、査読有

〔学会発表〕(計13件)

(1) 石黒圭「談話研究からみた話し方教育への示唆 学習者はディスコースマーカをどのように身につけるのか」日本語文

法項目用例文データベース『はごろも』研究会公開シンポジウム「談話研究から文法教育へ」パネリスト、2013.12.23、東洋大学(東京)

- (2) 石黒圭「日本語の独話における接続詞『で』の機能」日本英語学会第31回大会シンポジウム講師、2013.11.10、福岡大学(福岡)
- (3) 石黒圭「中国人日本語学習者の作文に見る接続表現」「論文の書き方」国際交流基金北京日本文化センター・中国教育部高等教育出版社共催 第8回全国大学日本語教師研修会講師、2013.7.22、長春長白山海航賓館(中国)
- (4) 志賀玲子・石黒圭「独話における終助詞『ね』の使用実態」2012年日本語教育国際研究大会ポスター発表、2012.8.18、名古屋大学(愛知)
- (5) 石黒圭「指示詞の使用に見る独話のジャンル性」第49回表現学会全国大会シンポジウム「広がる指示詞の世界 表現の『場』から指示詞を考える」パネリスト、2012.6.2、共立女子大学(東京)
- (6) 石黒圭「独話における接続詞『で』の出現をめぐって」学習者コーパスから見た日本語習得の難易度に基づく語彙・文法シラバスの構築研究発表会、2012.5.12、国立国語研究所(東京)
- (7) 石黒圭「独話・対話・文章対照コーパスの構築と利用『動的コーパス』の構想」『日本語教育研究リソースとしてのデータベースの構築と利用』東京外国語大学留学生日本語教育センター附属日本語学校と教材開発センター統合20周年記念国際シンポジウム「これからの教材開発・教育リソース研究を考える」パネリスト、2012.3.2、東京外国語大学(東京)

[図書](計3件)

- (1) 石黒圭『日本語は「空気」が決める 社会言語学入門』296、光文社、2013.5

6. 研究組織

(1) 研究代表者

石黒 圭 (ISHIGURO, Kei)
一橋大学・国際教育センター・教授
研究者番号：40313449